

令和 6 年 6 月 2 6 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12885

研究課題名（和文）映画製作所「P・C・L」に於ける近代的職場環境とフィルムスタイル

研究課題名（英文）Film Studio P.C.L.'s Modern Work Environment and Film Style

研究代表者

ヨハン ノルドストロム（Nordstrom, Johan）

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：00794322

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000 円

研究成果の概要（和文）：近代的な労働環境と映画スタイルの観点から日本映画史を検証し、日本映画産業の産業化と統合を助けたいくつかの革新をP.C.L.がどのように起こしたかを示し、日本映画産業が西洋式の製作モデル（P.C.L.は「プロデューサー・システム」を採用し、監督をプロデューサーの責任者とし、スタッフや俳優を他のスタジオのような終身雇用ではなく契約ベースで雇用し、比較的ヒエラルキーのない労働環境を実現した）を説明した。

研究成果は国際会議で発表され、2本の学術論文として発表された。さらに、研究成果を基に、エジンバラ大学出版局と、2025年末に出版予定の、研究テーマに関する長編研究書の出版契約を結んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

このプロジェクトで行った、映画製作場の視点から映画史を巡る研究は今までに日本ではあまりされておらず、映画研究の中では非常に注目すべき大きな一歩と言える。またアカデミアの世界だけではなく、国際映画祭を通して、幅広く海外の映画界において日本の戦前映画史を広めることができたインパクトがある研究と言える。さらに、1930年代のP.C.L.と日本の映画産業に関する長編研究は、2025年末にエジンバラ大学出版局から出版される予定であり、この種のものとしては初の長編研究となる。

研究成果の概要（英文）： This study has examined the influence of the early talkie film production company P.C.L. (later the film company Toho) on the Japanese film industry between 1933 and 1938, in terms of modern working conditions and film styles, and has shown how P.C.L. initiated several innovations that helped industrialise and consolidate the Japanese film industry, such as for instance the adoption of a Western style model of production. The results of which were presented at international conferences and published in academic papers. Furthermore, a publishing contract was signed with Edinburgh University Press for a full-length book on the topic of P.C.L. and the Japanese film industry during the 1930s, due for publication in 2025.

研究分野：芸術一般

キーワード：日本映画 映画史 映画製作制度 トークー映画 映像メディア

## 1．研究開始当初の背景

日本映画史において、無声映画からトーキー映画への移行は社会の変容を映し出し、まさに「モダニティー」の先端を表象するものであった。P・C・L（Photo Chemical Laboratory）は日本の初期トーキー（発声）製作会社であり、やがて、東宝（東宝株式会社）という日本を代表するエンターテインメント企業の中核を担う。本研究は、近代的職場環境とフィルムスタイルの観点から捉え、「P・C・L」が1933年から1938年における日本映画界に与えた影響力を考察するものである。これらを課題に選定した理由は、主に以下の二点である。第一に、日本のエンターテインメント企業の中核を担う映画会社東宝に発展するP・C・Lが、当時特にモダンな職場環境であったという点（モダンな職場、合理化を重視した事業形態、労働環境）。第二にP・C・Lが生み出したトーキーは、モダンなフィルムスタイルで現代的な都会の洗練された観客に向けた新たな娯楽と芸術映画を製作したという点である（映画様式、新たな娯楽映画と芸術映画の製作）。これらの理由から、本研究はP・C・Lの近代的職場環境とフィルムスタイルを思考することは、日本の大衆文化や戦前映画業界の特性を解明しうる重要な研究であると考えられる。

## 2．研究の目的

1930年代の撮影所については、これまでも少なからず論及の対象とはなってきたが、P・C・L撮影所が1930年代の日本映画のスタイルに与えたインパクトについては殆ど顧みられてこなかった。さらに、1930年代のP・C・L映画に於けるモダニティーと大衆文化との関連性についても、これまで詳細な研究は行われてこなかった。本研究は、このような研究状況を鑑み、映画製作所P・C・Lを通して、1930年代の映画製作所とそこで製作されたP・C・L映画に於けるモダニティーと大衆文化との連続性について考察することで、日本の映画研究における、撮影所研究（Film Studio Studies）という研究分野の確立に寄与するものであった。

本研究の特色は、撮影所内部の一次資料を用い、実証的な分析を行う点にある。近年、ノンフィルムマテリアルを用いた映画史研究が、国際的に進展をみせていった。特にフィルムの現存率が低い戦前の映画については、復元研究が重要な役割を果たしていった。また本研究では、P・C・Lの進歩的でモダンな職場と労働関係を考察するため、上記の撮影所内部の一次資料のノンフィルムマテリアルは正に非常に重大な研究の基盤となると考えられた。

さらに、P・C・Lが製作した映画に於ける映画美学とモダニティーを研究するため、今までに収集したP・C・L関係の映像資料（P・C・Lが製作した映画うち約80本、即ち2/3に該当する）も分析対象とした。本研究の最大の独創性の一つは、P・C・Lの近代的な映画スタイルを考察するに当たって、1930年代の日本映画の美学とモダニティーの分析を通して近代的な映画様式と大衆文化の関連性を考察することに研究の焦点を絞っている点にあった。これは、大衆文化としての映画が、1930年代の大衆文化形成の過程において、日本の歴史的、社会的文脈にいかに取り込まれたかを明らかにすることにつながると考えられた。なお、映画美学とモダニティー（Film Aesthetics and Modernity）と撮影所研究（Film Studio Studies）という二つの研究分野を用いてP・C・Lを分析することによって、本研究を将来的には、戦前の日本の大衆文化と映画史だけではなく、戦後の映画史と大衆文化の美学スタイルを比較する研究にも応用していけることが期待された。

### 3．研究の方法

本研究で明らかにしようとするのは(1) P・C・Lにて製作された映画に於ける映画美学と1930年代にモダンで近代的なスタイルをどのように製作されたか、そしてそのスタイルは具体的にどのように映画に現れたか、または大衆文化の中で、P・C・L映画がなぜある形態に固まったのかを分析した。特にP・C・Lの映画様式の特徴である、近代的な都会の洗練された観客に向けた娯楽と芸術映画の製作に注目した。(2) P・C・Lの進歩的かつモダンな職場と労働関係を社会的背景から考察、職場環境の中では特にモダンな職場であったP・C・Lについて、一次資料のノンフィルムマテリアルを用いながら、P・C・Lを特徴づける非封建的な組織構成、合理化を重視した事業形態、労働関係の細かい構成と社会的な位置付けなどの観点から明らかにした。なお第一、第二の内容に共通して、本研究を遂行するためには調査で収集したデータに基づきデータベースを構築し、基盤的研究を達成するために効果的に運用する。

本研究は、近代的職場環境とフィルムスタイルの観点から、日本映画史を捉え、初期トーキー映画製作所「P・C・L」(のちの映画会社「東宝」)が1933年から1938年の間に日本映画界に与えた影響力を考察するものである。その影響力を考察することにより、日本の大衆文化や戦前映画業界の特性を解明する。

初年度の令和3年度は、P・C・Lが生み出したトーキー映画のモダンなフィルムスタイルをよりよく理解するため、松竹と日活が製作した初期トーキー映画のフィルムスタイルを中心に研究を行った。令和4年度は、前年度には、P・C・Lが生み出したトーキー映画のモダンなフィルムスタイルをよりよく理解するため、トーキー時代に於ける弁士や活弁文化を中心に研究を行った。最終年度の令和5年度に、P・C・Lの代表的な監督木村荘十二の1930年代のトーキー映画のスタイルについて分析した、結果の一部は令和5年度の二つ国際会議「European Association of Japanese Studies」と「Aesthetics of Early Sound Film Revisited: Hybrid Films Between Silent and Sound」で発表した。「European Association of Japanese Studies」には『からゆきさん』(1937年)の映画スタイルと政治的な内容についての分析を紹介した。「Aesthetics of Early Sound Film Revisited」には木村監督の初期トーキー作品のサウンドと編集の取り扱い方についての分析を紹介した。さらに、この研究プロジェクトと研究者の映画スタジオP.C.L.に対する持続的な関心の結果、2023年中に国際的な学術出版社がスタジオP.C.L.をテーマとした書籍の出版に関心を示し、2026年後半にEdinburgh University Pressにより出版予定である。この研究プロジェクトの成果は、戦前日本映画史の重要な再考の一部であり、日本の初期サウンド映画と当時の映画産業に関する知識を広げるものである。

### 4．研究成果

研究成果として、査読付き論文を海外の出版社から論集として二冊出版した。さらに四つの国際学会でも発表した。研究成果は具体的にこれらに分けることができる：

令和3年度の研究を元にして、

P・C・Lが日本の大衆文化や戦前映画業界に与えた影響力を考察し、一つの国際学会で口頭発表をした：題名「Sound in the Early Talkies of Studio P.C.L: A Comparative Approach」、学会名『Aesthetics of Early Sound Film: Media Change around 1930』、場所University of Zurich(6月6日2021年)。または海外出版の論文(査読あり)を提出した：「Early Sound Film Aesthetics at Shochiku and Nikkatsu: A Comparative Approach」『Aesthetics of Early Sound Film: Media Change around 1930』[2023年出版] Amsterdam University Press.

令和4年度の研究を元にして、一つ海外出版予定の論文を提出した：「Benshi in the Era of the Talkie」『The World of the Benshi』 Yanai Initiative and the UCLA Film & Television Archive による出版 [2024 出版]した。

令和5年度の研究を元にして、研究成果の一部は木村荘十二監督の1930年代のトーキー映画のスタイルについて二つ国際会議「European Association of Japanese Studies」と「Aesthetics of Early Sound Film Revisited: Hybrid Films Between Silent and Sound」に発表した。

「European Association of Japanese Studies」には『からゆきさん』（1937年）の映画スタイルと政治的な内容についての分析を紹介した。「Aesthetics of Early Sound Film Revisited」には木村監督の初期トーキー作品のサウンドと編集の取り扱い方についての分析を紹介した。さらに、この研究プロジェクトと研究者の映画スタジオ P.C.L に対する持続的な関心の結果、2023年中に国際的な学術出版社がスタジオ P.C.L をテーマとした書籍の出版に関心を示し、2026年後半に Edinburgh University Press により出版予定である。この研究プロジェクトの成果は、戦前日本映画史の重要な再考の一部であり、日本の初期サウンド映画と当時の映画産業に関する知識を広げるものである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Johan Nordstrom
2. 発表標題 Transnational Currents in Japanese Pre-War Musicals
3. 学会等名 Transcultural Cinema Forum 2023（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Johan Nordstrom
2. 発表標題 Returning Prostitutes: Home, Family and Discrimination in Kimura Sotoji's Karayukisan (1937)
3. 学会等名 European Association of Japanese Studies（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Johan Nordstrom
2. 発表標題 Between Silence and Sound: The Aesthetics of the Japanese "Sound version"
3. 学会等名 Aesthetics of Early Sound Film Revisited: Hybrid Films Between Silent and Sound（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Johan Nordstrom
2. 発表標題 Sound in the Early Talkies of Studio P.C.L: A Comparative Approach
3. 学会等名 Aesthetics of Early Sound Film: Media Change around 1930（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1．著者名 Johan Nordstrom	4．発行年 2023年
2．出版社 Amsterdam University Press	5．総ページ数 18
3．書名 Early Japanese Sound Film Aesthetics at Shochiku and Nikkatsu, in "Aesthetics of Early Sound Film"	

1．著者名 Johan Nordstrom	4．発行年 2024年
2．出版社 The Yanai Initiative for Globalizing Japanese Humanities	5．総ページ数 16
3．書名 Benshi in the Era of the Talkie, in "The World of the Benshi"	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------